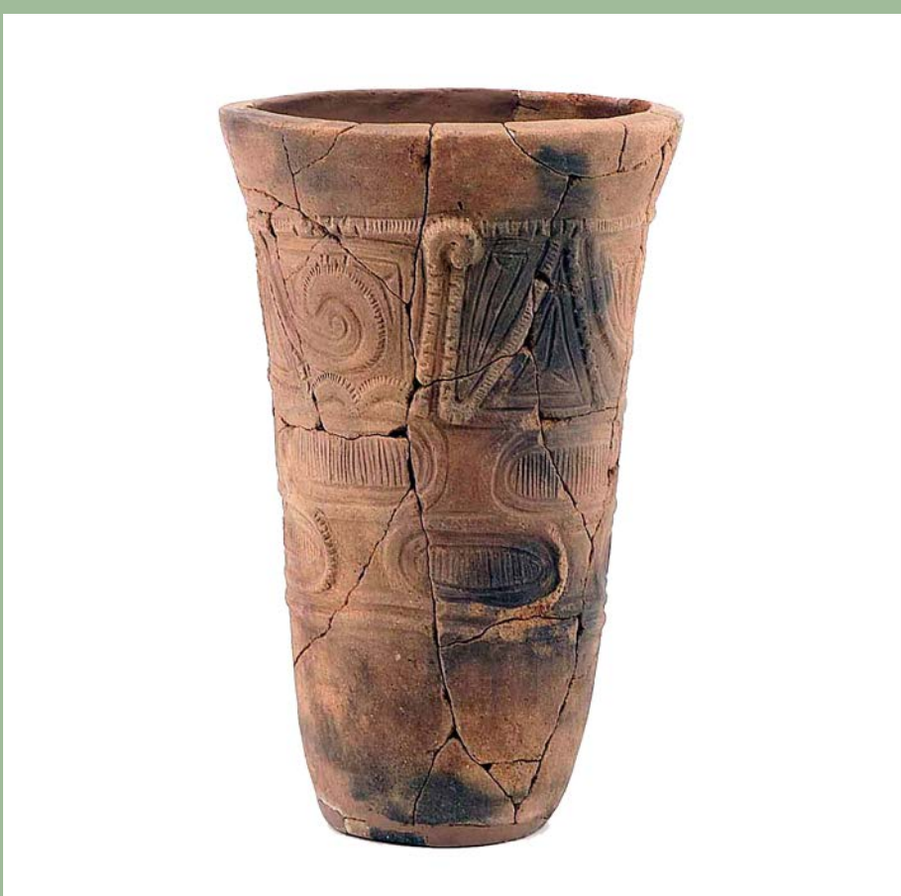
実物はどんなものか見てみよう！

槍先形尖頭器(栗原中丸遺跡)

旧石器時代から縄文時代の初め頃に作られた石器で、棒状の柄の先端に縛り付けて槍として使用したものです。頁岩という石で出来ていますが、地元ではほとんど見られない石材なので、東北地方の石材産地で作られたものが、持ち込まれたものと考えられています。

尖頭器は、大きな原石から薄い石材を打ち割って、さらに細かく打ち欠きながら木の葉の形に仕上げていきます。図中、太めの線で囲まれた部分は一回で打ち欠いた時の外形線、その中の細目の弧線は、その際に表面にできるリング状の痕跡です。

実物はどんなものか見てみよう！



縄文土器（原口遺跡）

主に煮炊きに使われた深鉢形の土器で、表面には使用時に付いた煤やコゲなどが見られます。縄文人はこの土器で、獣の肉や木の実などの山の幸、魚などの川や海の幸を調理して食べていたものと思われます。

胴には、先が尖った棒状の道具で線を引いたり、刻みを入れたり、また、粘土紐を貼りつけたりして、変化に富んだ文様を描いています。そのモチーフは、渦巻や三角形を主とした上半部と、横長の楕円を交互に組み合わせた下半部に分かれていて、何かの物語を表現しているかのようです。